

こころ日記 「ぼちぼち」 part II

脇野 千恵

「教員」からの卒業

昨年3月、30年以上働いてきた公立学校から退きました。大げさに言うなら、もう教壇には立たない、チョークは持たないと決心したということです。随分長く、学校現場に居座ってしまったなあというのが今の心境です。今学校は、人手不足。私のような60歳を過ぎた人間でも、まだまだ働き手として十分優遇されます。随分と引き留められました。実はこの仕事を辞めたいと思ったのは、もう5年程も前からでした。今の学校現場に魅力を感じなくなったというか、教育課程のめまぐるしい変化についていけなくなったということもあるでしょう。社会の変化に応じていかなければならないのに、慣例などにこだわり、相変わらずの閉塞感のある学校現場。本当に生きにくい場所だなと思いながら仕事をしていました。学校の常識は、世間の非常識だとよく言っていましたが、本当にあてはまる事柄をたくさん思い出すことができます。学校の組織しか知らないのだから、さして辞めて何ができるのと色々と思い巡らす日々です。

とりあえず、今は求められるままに、公立の適応指導教室の支援員として働いています。やっぱり、子どもと関わる仕事からは離れられないのだなと思えますが。

適応指導教室は、学校の別室にも入れない子が、相談や勉強、色々な活動にやって来る所です。まずは親子での相談を経て、教室に通えるかどうか体験します。実際に通室できる子は、年間5、6人くらいでしょうか。こういった機関はどこの行政も併設していますが、教室に来ると学校での出席扱いになるので、中学生などは進路のことを考え、頑張っってやって通ってきます。しかし、小学生は親の送迎が必要なので、通室にはどうしてもハードルが高くなってしまいます。送迎ができない親の元では、家庭に放置されがちな不登校生になってしまうのだなと思います。学校から離れると、見えなかったことが見えてくるなど、辛い時もしばしばです。

相談にやって来る子どもたちは、〇〇発達障じゃない？あるいはその傾向が強い？などと言われてきた子がほとんどです。心理業界の人たちとの仕事場は、診断、検査といった専門用語が飛び交っています。指導的な立ち位置にいる支援員との違いを感じますが、しばらくは、そういった子どもたちとも関わっていかうと思っています。

「塾」

少し自身のことを話すと、家庭の事情で教諭になる

機会を逸し、ずっと臨時講師として働いてきました。小学校、中学校合わせて13校の学校を渡り歩いてきましたが、義務教育での子どもたちの成長の過程をつぶさに見ることができたことは、良かったと思っています。

振り返ると、私と子どもとの関わりのスタートは塾経営でした。友人から引き継ぎ、一軒家を借りて細々と始め、自身の子どもと一緒に勉強をするという光景でした。その頃人気が出始めた近所のK文式塾は大はやりで、そっちの塾に生徒が流れていくなることがありましたが…。利益を上げる目的ではない私塾でしたので、あまり気にも留めてなかったように思います。

時間を決めず、「教室が開いている時間内なら、いつでも来ていいよ」という塾。生徒も少なかったので、個々への対応は充実していたように思います。時には、元気な中学生を家に招き、晩御飯を共にすることもありました。そういえば、生きたブラックバスをバケツに入れ、「刺身にしたらうまいで！」と届けてくれた生徒もいました。親子ハイキングなども企画し、保護者会も開き交流をしたのを覚えています。小学生と中学生との交流ができるほのぼのとした教室でした。

さて今、昼の支援員の仕事をしながら、夜、塾の手伝いをしています。早期退職をした友人の元教員が転職をし、塾長をしています。全国的に名の知れた塾ですが、まさか彼が転職として塾経営するとは、驚きでしたが。学校を辞めたのなら是非にと請われ、過去の塾での経験を活かせるのならと引き受けました。

それなりの偏差値の高い大学に通うアルバイト学生に交じって、「ばあば」と呼ばれるような私が、教えていいの？と初めは思いましたが、通ってくる生徒は様々で、なかなか面白いなあと思っています。

今の塾業界は、随分と様変わりをしてきています。予備校は別にして、ほとんどは個別式の学習方法を取り入れています。私が通う塾も完全個別式で、2人用の机に並んで座り、1時間に2人担当します。一方は国語、もう一方は数学といった感じで課題に取り組み

せ、残り30分は自主学習スペースに移り、自分で調

べ学習をしながら課題をして帰ります。宿題は必ず与えます。また、生徒の一人ひとりの記録シートがあり、授業後は毎時間細かく記録をします。授業態度、忘れ物はないか、遅刻しなかったか、宿題はやってきたか、課題の内容は何%できたかなどです。一番大変なのは、200字程度、その日の課題で何を教えたかを書かなければならないことです。できなかったことや、できたことも褒めなければなりません。教員時代の癖でしょうか、生徒の性格などに配慮しながら書くようにしています。タイムカードもあり、入退出の記録もします。記録カードは、その日のうちにメールにて保護者に送られます。指導者へのクレームがあれば、すぐに対処できるということもあるのでしょうか。幸い私へのクレームは今のところありませんが…。このようなことは、学校では到底できない対人サービスです。進路に関する情報も、学校は塾に負けています。きちんとしたデータをもとに、保護者会での綿密な話し合い。保護者からの信頼度は絶大です。

また塾に来る生徒の傾向として、不登校で学校へ行けない子が、学力をつけるためにと通って来る子が多いことです。個別授業というスタイルだから通えるのだと思いますが、人目を避けるために、隣町から来る生徒もいます。

私の担当する中学生にも、そういった子が何人かいます。「この部分は、中2で習ったよね？」と尋ねると、「学校へ行っていないので、わかりません」と答えます。学校現場にいるとき、「学校には来られんけど、塾には行ってるらしいで！」と憎々しげに悪口を言う教員がいましたが、親として子どもの進路を思えば、居場所と学力をお金で買えるのなら、塾も選択の一つなのだ。どんな形でも外に出られて勉強ができることに、それなりの価値はあると思います。

時々、「先生は学校にいたことがあるんですか？」と生徒に聞かれます。答えにつまってしまうのですが。たった週に一回、90分のふれあいではあるけれど、次第にそれなりの信頼関係が生まれてくるのが、ちょっと嬉しいです。

つづく